

連載 第17回

福聚山史

篠原 重一 文
及川 一晋 編

明治時代

2、二十九世～三十二世住職

・常円寺第二十九世精進院日解(秋山寿瑞)上人(正式には常円寺の初代から二十九代までの住職は「聖人」を称してよい。第十二代住職の時に本山本土寺より「永代聖号」を許されているからである)は、徳川幕府終焉の直前の、慶応二(一八六六)年七月、八王子本立寺第二十一世より常円寺に転任のお方である。上人は、それ以前に当寺二十六世住職より本山本土寺第四十七世住職となられた善種院(多田)日豊上人の後を受け、明治十年五月十五日に本山本土寺の四十八世住職になられたお方でもある。なお、本山四十七世日豊上人は、幕末維新には本山住職として幾多の難局に遭遇した上人で、本土寺の記録によれば、次のように伝えられている。

上人の時代に明治維新に遭い、その廃仏段釈を味わう。平賀はその思想の発生源とも言うべき水戸の菩提寺であったから、その波は烈しく朱印地の没収はもとよりのこと、境内地も建物の雨垂れ落ちまで失い四院・六坊の殆どは消え、諸堂も次第に荒廃するに依せる外はなかったようである。

日豊上人の終焉の地は、常円寺にほど近い修

行寺(現存は杉並区堀ノ内に移転。跡地は市谷富久町靖国通り際、四谷より暗闇坂・全長寺を下った所。本山本土寺の江戸常宿坊であった)で、明治十五年十二月十三日に八十四歳で入寂された。秋山寿瑞上人は、前記のごとく、先代日豊上人の後を嗣ぎ明治十年には既に本山住職になられるも、常円寺住職と兼務で本山には四年間の勤務であったが、ほとんど住まうことなく、常円寺で起居していたものと思われる。それほど本山の荒廃が甚だしかったのであろう。山田奇峰(日眞)著『法華名家掃苔録』の秋山日解の項には

文政三年備中高松稻荷秋山家に生れ、妙寂寺日詠について薙髪して寿瑞と称し、のち中村檀林(第二百十四世)能化日迅(顯慈院 福井小倉蓮蔵寺 歴代・八王子本立寺十七世・横須賀大明寺四十一世・平賀本土寺四十一世、四十五世再歴、下総佐原の人。平賀本土寺三十九世日浄の弟子)に師事した。維新前後八王子本立寺に住し大本堂(九間四面)を再建した。次で淀橋常円寺を董し、傍ら神田英学塾に通学、法華重量品を翻訳して法要に読み、帷を下して門弟に教えた。のち本山平賀を董した

との記載がある。明治五年当時の常円寺の僧侶は、住職日解上人と、八王子本立寺より同行したであろう

弟子壽仙と、そのほか壽悦の三人である。明治二年の江戸の町といえば、諸大名は府内の藩邸を引き払い国元へ、また多くの旗本は旧知行地へ帰るといふ状況であった。さらに、下級武士に至っても、住んでいた組屋敷までもが上地(取払い)となってしまうありさまで、町は閑散としていた。庶民の江戸からの離散も夥しく、旧江戸の町はさびれはてた状態となった。そんな諸事情によるものである。明治五年の『寺院明細帳』の記録によると、当時の常円寺の檀家の数は二百戸と、維新前と比較するとかなりの減少であったろうと思われる。その五年後、離散した旧江戸市民の多くが落ち着きを取り戻し、市内に戻り始めた頃には、日解上人をはじめ支援者の努力の賜物であろうか、明治十年の『日蓮宗明細簿』によれば檀家の数は三百四十四戸と急激に増加している。当時の常円寺内部の様子は、

幕末維新の大動乱にも関わらず、仏様はもとより建物も本堂・庫裏・祖師堂と無事で、文政十年(寺社書上)の昔より若干の増改築が見られるも現存したことは驚くべきことであった。さらに、前記したように上人は自ら英学塾に通学し、法華経重量品を翻訳し、これを法要に読み、門弟に教えており、宗門における「洋学の先駆者」と讃えられている。上人は明治十九年九月九日、常円寺にて遷化した。世寿六十七歳であった。

三十世を嗣がれたのが進誓院(学運)日辨上人である。『古板頭退座列名記』によると「慶應三(一八六七)年頃、中村檀林三老人座・板頭退座」とある。これはこの上人の最終学歴を示すものだが、当時の法華宗一教派の最高学府の一つである中村檀林(現在の本山日本

寺)の上座に在籍したということである。当時の中村檀林は数千人の学徒を擁し、上座とはそれを教える教授陣五名のことである。つまり「三老人座」とは三番目の教授として就任し、「板頭退座」とは一番目の教授として退任したということである。江戸時代中期の第十四代目の住職以降は上座という学歴がないと常円寺の住職にはなれなかったようである。歴代住職墓所に「三十世 進誓院日辨聖人 明治廿二年十一月五日」と刻石の墓碑がある。

三十一世住職は進龍院日泰(安原學成)上人である。『古板頭退座列名記』によると明治二年頃、中村檀林中座(上座の下にある十五名、分かりやすく言えば助教教授か)から京都東山檀林へ化主(学長)として招かれ、明治二十年一月二十九日、本山平賀本土寺五十世に晋み、四年間在籍の後、本山東都妙覺寺六十七世となる。歴代住職墓所に「本山五十世 當山三十一世 進龍院日泰聖人 大正十二年三月十五日」と刻石の墓碑がある。八十五歳名古屋にてのご遷化であった。

三十二世住職は體妙院日意(齋藤龍妙)上人である。上人は金沢の産で、若狭小浜藩士であった。当山二十六世日豊上人の弟子となり、牛込常立寺・市谷修行寺を歴任の後、本山住職に就任。明治二十七年五月二十四日、本山平賀本土寺五十二世の貌座に就く。上人も常円寺との兼務であったが、上人の代になって漸く本山復興の動きが見られるようになってきた。在籍十四年、志半ばで明治四十年九月二十四日、世寿七十六歳、常円寺にて遷化。師日豊上人の無念をよくよく背負った一生涯と推察される。宗門にては本山議員を務めた。

(つづく)